善正寺だより

〒:512-0902
三重県四日市市
小杉町1014
浄土真宗
本願寺派
善正寺
☎:059-331-1670
fax:059-332-0733

掲示板法話

「共に凡夫」の心にこそ真実の「和」が開かれる

今年は聖徳太子の薨去（西暦六二二年、四九歳）から千四百回忌に当たり、太子ゆかりの法隆寺、叡福寺などで千四百年遠忌法要が営まれ、仏教各宗派がこぞって法要を営みました。西本願寺でも春の法要にて勤修されました。

聖徳太子は、叔母に当たる推古天皇の時代の摂政として国政を担い、その国づくりの理念を仏教精神に置いて、「十七条憲法」を制定されました。

「和を以て貴しとなす」（第一条）、**「篤く三宝を敬え。三宝は、仏、法、僧なり。・・・それ、三宝に帰りまつらずは、何を以てか枉（まが）れるを直さん」**（第二条）と示され、仏法を拠り所に国を治めようとの宣言です。

浄土真宗の本願寺でも一般寺院でも聖徳太子さまの御影像が余間に奉懸されています。その訳は、親鸞聖人が生涯を通じて聖徳太子を「和国の教主」即ち、日本のお釈迦さまとまで敬っておられるからなのです。

親鸞聖人は生涯の節目、節目に聖徳太子の夢を見られ、大きな影響を受けられました。十九歳、磯長の太子廟に参詣の折「あなたの命は後十年」との夢告を受け、比叡山での修行に一層励まれました。それから十年後の二十九歳、太子ゆかりの六角堂に百日参篭を決断され、九十五日目の明け方再び観音菩薩が聖徳太子の姿で夢に出られ、比叡山を下り、吉水の法然聖人の所に入門する決断をされたのです。

そして晩年、関東での念仏者集団の問題を沈静化すべく派遣した長男・善鸞が念仏者集団の有力者の非難を招き、事態を収拾するために善鸞義絶という苦渋の決断を下されました。その辛く悲しいご体験から八ヵ月後、八十五歳の二月九日早暁、聖徳太子さまから夢告を受けられ、覚醒を促すがごとき御和讃を感得されたのです。

弥陀の本願信ずべし
本願信ずるひとはみな
摂取不捨の利益にて
無上覚をばさとるなり

本願信ずる人は、今この世からこの上なき覚りを賜るのだという、力強い仏さまの言葉に遇われたのですね。

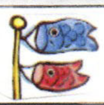
それに勇躍歓喜され、再び聖人は苦悩を超えて、正像末和讃や太子を讃える和讃の制作など、老境とは思えぬ超人的な著述に勤しまれたのでした。

親鸞聖人が聖徳太子を観音菩薩の化身として敬い、心の拠り所とされたご信境は如何なるものがあるのか？

「我必ず聖にあらず、彼必ず愚かにあらず、共に是れ凡夫」（十七条憲法・第十条）との諦観を基に、政治の世界に身を置きながらも俗世界に埋没せず身をもって仏道を歩まれたお方であったからだと思われます。太子は、流罪と共に「非僧非俗」の道を歩まれた親鸞さまの大先達でありました。

「共に是凡夫」との心にこそ、真実の「和」が開かれるのでしょう。

☆行事ご案内☆



◇令和３年度『善正寺門信徒会総会』
①2年度報告、決算、②3年度計画、予算等諮る総会、
5月16日(日)午前10時
皆さんご出席下さい。
※　行事様より出欠の返事（委任状）を集めて頂きます。
コロナで変更の時は随時連絡します。
※4月18日（日）午前8時半新行事長、新会計の選出を行いました。詳しくは来月号に記載

◇一縁会テレホン法話 ℡０５９・３５４・１４５４
4月5日から1週間毎に善正寺住職・坊守・若院が登場

◇絵手紙教室5月11日（第2火）10時、庫裏61回目
川崎光子先生、小杉郵便局に展示。初心者歓迎

◇歌声教室5月20日（第3木）後1時、本堂21回目
プロジェクターを使い、ギターとマンドリン伴奏

◇夕方5時の鐘撞き　年中無休で誰にでも開放
ガムやチョコのご褒美、ちかいの言葉、ブッダが先生

◇三全仏婦降誕会4月17日（土）1時光念寺様にて

◇善正寺ホームページ「三重善正寺」で検索1年分の寺報閲覧、毎日更新ブログ『住職と坊守のつれづれ日記』好評。開設12年9カ月で34万4千訪問。悩み相談歓迎

◇新納骨堂後継者の無い方お墓でお困りの方相談下さい

◇法事場所でお困りの方、本堂使用可、寺にご相談下さい

☆　写真アラカルト　☆

坊守（ぼうもり）スケッチ　壊れてゆく家族

４月初めＮＨＫで「同居孤独死」というドキュメンタリー番組を見た。

昨年実際に東海地方で起きた事件。70代の父親の遺体を半年間放置したまま40代の息子が同居していた。普段から親子の会話もなくすれ違いの生活だった。葬式を出せない事情があったのか？記者はその原因を探った。

抑々父親は転職が多く引っ越しを繰り返していた。息子が中２の時に離婚して母親は家を出た。息子も大学進学で家を出たが、８年前に父親が障害の残る持病を患った為に、息子が父親と同居することになった。退職して閉じこもりがちな父親と、朝から晩まで働く息子との生活はすれ違いばかり。息子は父の為に一生懸命尽くしたが、やがて父親の息子だからして当たり前という態度に感情が爆発。それ以降食事作りも別々にするようになった。

去年２月父親が持病で急死。息子は途中で異臭を感じたが、気にせず一人キャンプに出かけた。半年後、父親と連絡が取れず、異変に気付いた姉が、警察に通報して事件が発覚した。

せっかくこの世に親子として巡り会いながら、最期の別れさえも誰一人見送ることもできない家庭事情。現代日本の家族の闇を浮き彫りにしているような事件だ。昨今壊れていく家族が原因の事件が増えつつある。その原因はどこにあるのだろうか？

ある週刊誌の宣伝に「著名人たちによる70歳過ぎて止めたらこんなに幸せ。子供や友人との距離の取り方、年賀状も冠婚葬祭も要らない」という見出しが堂々と出ていた。さも終活こそが、幸せな人生の仕舞い方のような論調だ。見栄も、しがらみも、モノも全て断捨離せよ。それが正義だと言わんばかりだ。

しかし今まで築いてきた家族の繋がりや全てのご縁を断捨離した結果が、今回の親の葬式も出せない子供達を生み出したのではないだろうか？

私達は今一度原点に戻って、人間としての温かな心を取り戻したい。拝みあう家族、拝みあう隣人同士の、思いやり溢れた心を持つように努めたい。

俳壇

和の味や雑誌賑わすさくら餅　釋妙水
通勤時見上げて歩くサクラかな
ランドセル揺れて笑顔や咲く桜
とどろきて急峻落下花の滝　釋楽邦
真夜中の月冴え返る天高く
笹群らに拳をあげる蕨かな
伊勢の海墨絵のごとき遠霞　釋清風
風雨去り花の散りそむ夜明けかな
ランドセル弾みまぶしや花吹雪
友情のクラス見守る葉桜よ　釋秀龍
そよ風にゆれてほほ笑む白木蓮
どこからかぼく誘い出すさへずりよ

若坊守の子育て日記No.77

春休みに入ってすぐ、長女の幼稚園のお友達と市内一大きな公園へ遊びに行きました。親子九組、二～八歳の子どもが揃い、賑やかな一日でした。

新一年生の九人は、ピカピカのランドセルを背負い、おめかししして咲き始めた桜の下で記念写真も撮りました。

その後、昼食や遊具で遊ぶなどしていたのですが、問題発生。全く知らない小学生男児に背中を叩かれたと言って、長女の同級生の男の子が親の元へ戻ってきました。少し涙ぐんでいる様子で母親に慰められています。長男に詳しく聞くと、長男たち小学生組は例の男児に暴言を吐かれたと憤っています。問題の男児の親も見当たらず、ハラハラした母親たちが近くで見守ることにしました。

結局、母親の一人が「叩かず仲良くしよう、みんなで鬼ごっこしよう」と諭して、納得した子どもたちは一緒に遊び始めました。例の男児は二年生、活発なボスタイプの子ですが年下の女の子には優しい様子です。

これが大人の世界だったら、「話のわからない人」で終わり、理解しあうことは難しいでしょう。異なる環境で育った子どもたちが、話し合って順応できる姿に親も学ぶ点がありました。

カンパありがとう

水谷勝子様、Ｏ・Ａ様、花井進様他、匿名様より有難うございました。

ホットニュース

※一縁会テレホン法話が３週間連続で善正寺メンバーが１週間毎に入れ替わって登場します。４月５日（月）～１１日（日）は住職。１２日（月）～１８日（日）は坊守。１９日（月）～２５日（日）は若院が担当。特に坊守は先代住職が作った歌をギターの弾き語りで歌います。℡０５９・３５４・１４５４へ是非一度お電話下さい。

※４年生と１年生になった孫二人が毎朝７時半過ぎ新居前から登校班のお友達と出発します。散歩から帰宅後、朝食をそそくさと済ませた私達老夫婦は見送るのが日課です。これからも６年間続けられるように頑張ります。

※目下俳句に夢中の孫二人が大好きな番組は『プレバト俳句合戦』。永世名人の梅沢富美男氏にファンレターを出したところ、写真付きサイン色紙が夫々に届きました。有名人の誠実さに感激し、益々俳句熱が高まりそうです。

☆　編集子より　☆

「善正寺だより」三二九号をお届けします。◇第三波の宣言が解除されてまもなく、強力な変異ウイルスの第四波が押し寄せるとは何たることか？ワクチン接種が待たれます。◇だが、医療現場や保健所等のご苦労は戦場のようだ、とか聞けば唯々ご苦労に感謝。◇お念仏相続を願いつつ、合掌・称名。

コロナ感染拡大が2年目に突入しました。変異株ウィルスによる第4波が襲来して油断がなりません。東京オリンピックが果たして開催できるかどうか疑心暗鬼です。「思い切って中止したら？」と部外者は気楽に言いますが、アスリートや長年準備された担当者のご苦労を思うと、簡単には止められません。コロナで観光業や飲食業は大打撃を受け廃業する人も多いと聞きます。「お寺、だって例外ではないでしょう。休業補償がある訳でなし葬儀やお参りも減少して大変ではないですかて、」と尋ねられます。「ご心配ありがとうございます。勿論弱音を吐きたいところですが、今しばらくの辛抱と思いじっと耐えています」と返答。29年間毎月発行した寺報と13年間毎日投稿するブログ『住職と坊守のつれづれ日記』は、私達の日々の足跡であり体力と気力が続く限り努めます。コロナで行事を中止するのではなくて短縮版でお勤めします。それでなければ、私達よりもずっと貧しく苦しい状況の中でも勤められた戦前、戦中、戦後のご先祖に対して申し訳ない気持ちがします。やがて安心して活動ができる日を夢見て、オンラインを使った新たな伝道方法も模索します。過去に戻ることはできませんが、周囲には心の救いを求める人で溢れています。我が力で解決できない悩みを抱えた人々に、お念仏の教えが届けられますように益々精進したいと思います。どうか皆様のご支援ご協力の程をよろしくお願い申し上げます。

合掌　善正寺坊守拝

令和三年五月